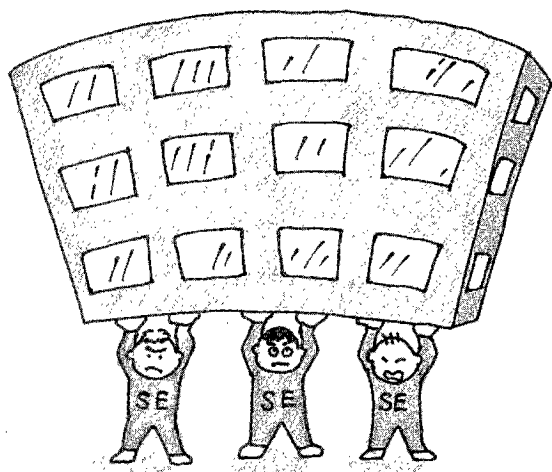


# SE の 知恵袋

妹尾 稔  
名古屋商科大学

## 第12回 SE諸君 時代の変化をつかめ



絵 細田直子

### 3文字文化

コンピュータは“自分とは無縁の世界である”とか、“システムに関してはコンピュータ屋にやらせておけ”等々言っていた多くの企業人がIT (Information Technology = 情報技術) という2文字に恐れおののき、秘かにパソコンスクールの門をたたくといった社会現象が最近発生してきている。

かつて情報システム部門は“金喰い虫である”とか“無駄な資料の印刷所”といった批判にさらされていた。また、システム化案件の説明会を開催しても、分かりにくいコンピュータ用語 (3文字が多い) を駆使してユーザを煙に巻いてしまう傾向があった。ユーザには十分理解されないまま、結局“システムのことはコンピュータ屋に委せておけ”的な雰囲気が作られ、情報システム部門のSEたちは別世界の人間と見なされてきた。これをいいことにSEたちはこちらの言うことが理解されないのは、“我々の責任ではなくてユーザ側が理解しようとする努力をしないからだ”とうそぶき、自分たち特有の3文字文化の世界を築き、安住の地とする始末であった。

ところが最近、様相が一変し、インターネットの進展の影響を受けて、企業人だけでなく、一般市民までもが、ITの大きなうねりの波の中に飲み込まれ、3文字文化もかなり一般化してきたようである。

### ビジネス・モデルの提案

情報システム部門のSEが競争優位を獲得するために情報システムを戦略手段としてこんな仕掛けがビジネスに必要であると提案しても“商売をやった経験もないSEに何が分かる”といった風潮であまり重要視されていなかった。

しかし、状況が変化し、インターネット時代を迎え企業が生き抜いていくためにはITを活用した新しいビジネス・モデルの構築が必須となってきた。

このビジネス・モデルを提案するのに比較的近い位置にいるのがSE諸君なのである。つまり、過去の多くの開発業務で得た知識や情報技術を使って新たなビジネス・モデルをSE側の視点で積極的に提案するチャンスが今なのである。

かつてコンピュータ化推進の初期段階で“情報システムが効率化や省力化にとってこんな効果を発揮し、し

かも自分たちの仕事を楽にする道具だ”ということを一  
般ユーザに知らしめるために、小規模のシステムを開  
発・運用し、実際に使って便利さを体験させること  
により、システム化の支持者(サッカーでいうサポータ)  
の輪を拡げる手法を活用した。

新たなビジネス・モデルを提案し、実際に構築・運  
用をはかり、それが企業発展にとっていかに有効な働  
きをするかを実際に見せることが大切なのである。同  
時に、新しいビジネス・モデル作りが企業経営に重要  
な役割を果たすことを全社的に認知させることも大切  
な役割でもある。

これには前述したシステム化の推進と同じ手法を使  
い、実際にやってみせ、成功体験をさせ、サポータの  
輪を拡げる方法が最良なのである。

このとき注意しなければならないのは、今までのよ  
うに一握りの先進的な企業やマスコミに踊らされた一  
部の人々だけが一生懸命取り組んでも、一過性的なブ  
ームの様相を呈するだけで、最終的にはしりつぼみ状  
態で終わってしまうことである。

今回の新しいビジネス・モデルの提案は、提案でき  
る最短距離にいるSEだけの問題とするのではなく、全  
社員を巻き込んだ活動にすることが必須条件なのであ  
る。従来のシステム化は一部の限られた情報技術者に  
委ねられていた。これに対し、インターネットの普及  
や開発の容易さが進展してくるとこのような時代は終  
焉を迎えたのである。

ITを使ったビジネス・モデルを構想する力や提案する  
力が全社にあるかが企業が生き残れるか否かの大き  
な岐路に立つ時代なのである。その意味で、システ  
ム部門のSEは率先して新しいビジネス・モデルを提案  
し、企業全体の底上げをはかる重要な責任を負ってい  
るのである。

## 期待されるSE像

前述したようにSEに求められる能力は、従来と比べ  
るとだいぶ変わってきていることに気付いたと思う。  
従来は情報技術に秀でていれば何とかこなしていたが、  
これからは、情報技術をベースにそれを上手に活用し  
ていくことによって企業の利益や発展に寄与すること  
が重要な点であり、先進的な技術を追求するだけでは  
勝負にならない。それを企業の業績アップにどうつな  
げるかが大切なのである。

数年前の戦略的情報システムの時代には経営戦略と

情報化戦略の一体化が叫ばれていた。しかし、その割  
には企業内にこのコンセプトが必ずしも十分に浸透し  
ていなかった。それに対して現在ではトップも経営戦  
略を考えるうえで、この情報技術は経営資源の重要な  
一部であり、しかも一体化したものであるといった考  
えを持つようになり、SE諸君が腕を十分ふるえる時代  
がきたのである。

今までのように情報技術に固執するのではなく、一  
般的な企業人として、改革的な視点で企業の発展のた  
めにさまざまな局面に情報技術を応用できる能力を身  
に付けて、さらに新たなビジネス・モデルを構想でき  
る能力が求められているのである。

## ダメSEのモデル像

このように時代が急激な変化を遂げているにもかかわらず、  
相変わらず先端的な情報技術のみを追いかけ  
ていたり、自社の情報化レベルを十分に考えもせずに  
理想論に浸りきっている技術者がいる。これがダメSE  
のモデルなのである。今は企業経営の中にITを組み込み、  
強い企業体質の早期の確立が求められており、一般ユ  
ーザの情報リテラシー能力をいかにして底上げしてい  
くかが重要なのである。そこで下記のようなダメSE像  
に自分になっていないかチェックして欲しい。

- イ. 自分の技術だけが通用すると錯覚している。
- ロ. 新技術だけを追い回し、それを吸収することが仕  
事だと思い込んでいる。
- ハ. 多忙をきわめているだけで、会社から何を真に期  
待されているかを十分に考えず、ただ仕事を毎日  
こなしているだけ。
- ニ. 既存システムをうまく運用することだけが仕事と  
思い込みうまく稼働できていれば安心している。
- ホ. “SEは特権階級である”という意識から脱皮できず、  
いまだに専門知識の自信過剰から、ユーザの言う  
ことを無視したり、経営ニーズに無頓着であつた  
りする。

(平成13年2月3日受付)